

湖水地方旅行書に登場するワーズワス

小田 友 弥

(英文学)

1812年の『チャイルド・ハロルドの巡歴』(*Childe Harold's Pilgrimage*) 出版によるバイロン卿 (George Gordon, 6th Baron, 1788-1824) の文名の高まりは急激で、彼は「私はある朝に目覚めたら有名になっていた」と述べたとされている。バイロンとは対照的に、ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の名声の高まりは極めて緩慢なものであった。彼の詩人としての文名が上昇していく過程は幾つかの書で詳しく辿られている。¹ だが、これらの書は、湖水地方旅行記・旅行案内でのワーズワスの扱いに殆ど配慮しておらず、重要な部分が欠落している印象を与える。本論は、ワーズワス研究におけるこの欠落を補充することを目的としている。

湖水地方旅行が盛んになった18世紀後半以降、この地方の旅行記や旅行案内書が次々と出版されている。本論は、そうした書籍におけるウィリアム・ワーズワスに関する記述を初期から1860年頃まで追跡しているが、論を進める便宜上、1800年ごろから1820年ごろ、1821年から1840年、1840年以降の三つの時期に分けている。この時期にどのような湖水地方案内書が出版されたかは、湖水地方関連図書の書肆的研究であるPeter Bicknell, *The Picturesque Scenery of the Lake District* (Winchester: St Paul's Bibliographies, 1990) によっており、本論はこの書にあげられた殆どすべての書籍におけるワーズワスへの言及を調査し、ワーズワスの扱い方で、各時期の特徴を示すと思われるものを取り上げている。

I

湖水地方旅行書で最初にワーズワスに触れているのは、書簡形式で書かれたRichard Warner, *A Tour through the Northern Counties of England, and the Borders of Scotland*, 2 vols. (1802) である。著者のウォーナーは聖職者で、ワーズワスとは旧知の間柄であった。彼らは1798年7月に共通の友人を通して知り合いになり、ウォーナーは翌日にワーズワスを食事に招いている。彼は前年にウェールズやティンターン修道院を旅行し、1798年初めにその記録 *A Walk through Wales, in August 1797* を出版していた。この時にウォーナーが語ったことが、ワーズワスのティンターン修道院再訪に少なからず影響したことはよく知られている。²

ウォーナーは1801年にイングランド北部とスコットランド国境地帯を旅行し、その記録を

1802年に、上述の書簡体の旅行記として出版した。下巻に収められた第6書簡において彼は、ワーズワスの友人コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）と、湖水地方を回ったことを伝えている。彼はコールリッジから、山岳地では、何気ない笑い声が、こだまによって突然増幅されることがあることを聞き、その例証として「彼の友人でグラスミアに住む隣人ワーズワス」（2:101）の詩「ジョアンナに」（“To Joanna”）の38-76行を引用している。続いてウォーナーは、湖水地方の谷筋に暮らす、ステイツマンと呼ばれる小土地保有自営農民の生活ぶりを紹介している（2:102-104）。以上がこの旅行記でのワーズワスに関連する記述のすべてで、彼はワーズワスとの湖水地方での交流には触れていない。だが二人が1798年に知り合っていたことや、ワーズワスが関心を寄せていた、ステイツマンについてウォーナーが詳しく述べていること、ウォーナーの自伝での記述などから判断して、この旅行中に彼がワーズワスとも交流を持ったことは間違いない。³

湖水地方旅行書にワーズワスに関する次の記述は、ルイ・シモン（Louis Simond）が1815年に2巻本で出版した *Journal of a Tour and Residence in Great Britain, during the Years 1810 and 1811* まで待たねばならない。著者のシモンはフランス人で、20年ほどアメリカで暮らしてから、イギリスを見るために1810年にイギリスにやってきた。こうしたことが、序文に記されているが、彼についてはそれ以上のことはわからない。彼は8月5日にアンブルサイド（Ambleside）に到着し、数日湖水地方に滞在してからスコットランドに向かっている。

シモンの一行は9月中旬に再び湖水地方にもどった。そして9月19日の項で、イギリスでは金持ちは土地の購入に熱心で、土地の値段と労賃が高いことから、農民が所有地を手放すことが進行しており、これは革命を招く危険性があると指摘している（337-8）。彼はまた、昔ながらの、小土地保有農民「ステイツマン」が、日々減少していると言っている（338）。

10月10日、シモンはグラスミアでワーズワスに会った。彼について「グラスミア湖畔で暮らすワーズワス氏は、親切にもその湖の美しい場所数か所に我々を案内してくれた。北端のあたりには、自然のままの荒々しいところもあった。」（343）と述べてから、彼の住居近くの小さな土地が法外な値段で売れたことに言及している。シモンはまた、グリーンという貧しい農民夫婦が吹雪の夜に山越えし、断崖から落ちて死亡した話も伝えている（343）。彼は10月14日をダーウェント湖周辺で過ごし、サウジー（Robert Southey, 1774-1843）に会っている。そしてサウジーは約15年前に、コールリッジやワーズワスとともに革命的熱情を抱き、大西洋を渡りアメリカで自由の空気を吸おうとしたが、少しばかり時間をおいたら情熱が冷めてしまった、と彼らの政治的変節を皮肉るような発言をしている。

ワーズワスがシモンを知ったのは、トマス・ド・クインシー（Thomas De Quincey, 1785-1859）を介してであった。ド・クインシーは『湖水派詩人の思い出』の中で、彼がミラー夫

湖水地方旅行書に登場するワーズワス

人という人物を通じてシモンと知り合いになったと語っている。⁴ 前述のようにシモンの一行は8月上旬に湖水地方に来てから、再び訪れるまでの約1か月をスコットランドで過ごしている。この間に、『エディンバラ・レビュー』（*Edinburgh Review*）誌の編集者のフランシス・ジェフリー（Francis Jeffrey, 1773-1850）が、彼の一行の女性に恋し、後日結婚している。第IV章で詳しく述べるが、ジェフリーは第I章で扱う期間でのワーズワスの不評をもたらした中心人物で、ワーズワスは非常に嫌悪していた。ド・クインシーは、このようなシモンの一行を伴い、10月10日にグラスミアにワーズワスを訪ねたわけである。ド・クインシーはその際の印象から、シモンとワーズワスの間に一種の反目を感じた、と言っている（254）。これはシモンがジェフリーのワーズワス評に感化されていたためかもしれない。そしてジェフリーの影響は、ワーズワスやサウジーの政治的変節を匂わせるようなシモンの文章にも反映されていると思われる。ただシモンは湖水地方の伝統的農民層ステイツマンの衰退やグリーンに死に触れているが、これらはワーズワスの心配の種であったので、ワーズワスの主張のしかるべきところには、十分耳を傾けていたと言える。⁵

1816年、ジョゼフ・ファリントン（Joseph Farington, 1747-1821）が描いた43枚の湖水地方の絵を版画化したものに、トマス・ホーン（Thomas Hartwell Horne, 1780-1862）の説明文と旅行案内を添えた豪華本が出版された。湖水地方の最大の魅力は景観美であったので、この地方への案内書には美しい景色の版画にその説明を添えたものが相当数出版されていた。ホーンらの書もそうしたものの一つであった。また、1778年に初版が発刊され、1821年に第11版が出たトマス・ウェストの『湖水地方旅行案内』（*A Guide to the Lakes*）は、湖水地方案内書の典型と言えるものであるが、この書では湖水地方の見どころを紹介するにあたって、トマス・グレイ（Thomas Gray, 1716-71）やアーサー・ヤング（Arthur Young, 1741-1820）などの、彼に先立つ人々の景観描写を随所にちりばめている。ウェストの書を契機に、先人の文章を景観描写の一助として利用することが広く行われるようになった。その際、散文だけではなく詩行が折に触れて挿入されたが、そうした詩行の大半は湖水地方とは直接関連を持たないものであった。ロドアの滝の描写に援用されるトムソン（James Thomson, 1700-48）の『四季』（*The Seasons*）の「夏」590-606行などは、その代表的な例と言える。ところが本書では、有名なライダルの滝の説明に続いて「ライダル・マウントは称賛を博している『逍遙篇』の著者の住居である。彼は自作において付近の湖や山岳の光景に備わった美しさを見事に描いている。」（27）と述べ、ワーズワスの作品、特に『逍遙篇』（*The Excursion, 1814*）から多くの引用をしている。ホーンらの書では、ワーズワスの詩行がトムソンなどのものに代って用いられているのである。こうした引用は、例えばグラスミア教会の紹介にあげられた『逍遙篇』第5巻153-63行（29）のように大部分は適切なのだが、グラスミアの牧師の住居を描いた第8巻461-67行が、ラナーコスト修道院の説明に用いられてい

るように、ちぐはぐな印象を与えるものもある。これは、取り上げる湖水地方の地域に対応するワーズワスの詩行が、まだ十分に集積されていないことを示唆するように思われる。

第I章が扱う期間の著作で、ワーズワスに最後に触れているのは、1819年に上梓された John Robinson, *A Guide to the Lakes, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire* である。ここでも『逍遙篇』などからの相当数の引用が湖水地方の景色の説明に用いられ、ホーンの書にはない幾つかの詩にも言及されている。例えばスキドー山に関して「ペリコン山とオッサ山は並んで高くそびえる」(“Pelicon and Ossa flourish side by side”)の10-14行を引用している(120)が、このソネットは1801年に作られ、1815年の詩集に収められたものである。またグラスミアに関する部分で「ジョアンナに」の51-65行が引かれているが、この詩はウォーナーも引用していた。こうした点は、場面に即したワーズワスの蓄積がホーンなどの書より進んでいる、という印象を与える。

以上のように、19世紀初めの20年ほどの期間中、ワーズワスは湖水地方関係書に殆ど登場していない。確かに1802年と1815年には言及されているのだが、取り上げたのは知人であった。だが、ホーンとロビンソンはウェストの方法に倣い、多くの先人の文章を挿入するなかで、ワーズワスの詩句を説明の一環として採用している。そして、ホーンよりロビンソンのほうが、ワーズワスと湖水地方の関連に関する言及の幅が広いという印象を与える。これは湖水地方案内書では新しい点で、以後に起こることの先触れになっているように思われる。

II

1821年から1840年の期間には、約40冊の湖水地方旅行書が出版されている。そのなかで、ワーズワスに触れていないのは、Jonathan Otley, *A Concise Description of the English Lakes, and Adjacent Mountains, with General Directions to Tourists* (1825) など極少数しかなくなる。私はこの時期のものから、最初にTheodore Henry and John Walton, *A Picturesque Tour of the Lakes, Containing a Description of the Most Romantic Scenery of Cumberland, Westmoreland, and Lancashire* (1821) を取り上げたい。ヘンリーとウォルトンの書は、ホーンらのものと同じ系統に属している。画家である二人の版画は魅力的だし、ヘンリーが書いたと推定される説明文も充実している。この書でも、ホーンやロビンソンのものと同様に、かなりのワーズワスの詩行を景観の説明に用いているが、本論ではそうしたものを逐一指摘することはせず、この書におけるワーズワスの扱い方の特徴を示すと思われる点に触れておきたい。

この案内書で紹介されるルートはウェストの『湖水地方旅行案内』と同じで、ランカスターからファーネス修道院へと進んでいる。そこでワーズワスから6行引用している(12)が、それらの詩行は、『序曲』(*The Prelude*, 1850) 第1巻401-407行となるものであった。周知

湖水地方旅行書に登場するワーズワス

のように『序曲』はワーズワスの死後出版されているが、これらの詩行は1815年詩集に収録されていたので、ヘンリーはそれを読んだことになる。このことは、ヘンリーがワーズワスの出版物を丹念に追っていたことを示唆している。

ロビンソンは彼の書のホークスヘッドを扱った281ページで、ワーズワスがこの地の文法学校で学んだと思う、と言っている。ヘンリーはそれを確証するものとして、ワーズワスの『夕べの散策』(*An Evening Walk*, 1793) 15-20行をあげている。ここには“Where twilight glens endear my Esthwaite's shore,” (15) のような、ワーズワスとホークスヘッドの結びつきを語る詩行が含まれているのである。『夕べの散策』はワーズワスの最初の出版物であったが、1820年頃は殆ど世間から忘れ去られた状態にあった。さらにヘンリーは、この学校でワーズワスの弟ジョンも学んだことを示すものとして「土地の名付けの詩群」(“Poems on the Naming of Places”)の一作である「忙しい世間の魅力に」(“When, to the attractions of the busy world”)の67-69, 76-79行を引用している。「土地の名付けの詩群」は6篇で構成されているが、1802年に創作されたこの詩は、他の5篇が『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1800)に収録されたのとは異なり、1815年詩集に収められた。さらに31ページの注ではワーズワスを「これらの湖の偉大な詩人」と評し『抒情歌謡集』の序文から引用しているし、32ページではホークスヘッド近辺にはハシバミが多いと述べ、ワーズワスの「ハシバミ採り」(“Nutting”)から引いている。こうした引用や言及からも、ヘンリーがワーズワスの熱心な読者であることが窺われる。

ライダルに関する記述で著者は、ライダル・マウント (Rydal Mount) が詩人ワーズワスの住居であると紹介し、以下のように続けている (101-102)。ここからの眺めはよいが、眺め如何に拘わらず、ここは本物の詩の愛好者の関心をひきつけ続けるだろう。ワーズワスの詩は、彼の郷里の岩のように時流に流される類のものではないからである。そして、彼に対する一般の人々の判断を誤らせた、軽薄な北方の批評家 (恐らくジェフリー) の名が忘れ去られる時、彼は英国詩人の間で、シェクスピアやミルトンと並ぶ榮譽ある地位を占めることになるだろう。このように述べてからヘンリーは、外来者や流入してくる商業主義と接することで、地域住民に起こった変化に対して、ワーズワスは穏やかな気持でいられないだろうと考え、その例証として「石筆で石の上に書いた詩章」(“Lines Written with a Slate-pencil upon a stone”)の全行を掲げている。こうした叙述には、ワーズワスに対する理解と信頼感が滲んでいる。

次に本論で取り上げるのは、男女4人の湖水地方旅行記であるEdward Baines, *A Companion to the Lakes of Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*, 2nd. ed. (1830)⁶である。湖水地方旅行書には、大別するとウェストに代表される旅行案内と、ウォーナーのもののような旅行記がある。旅行記は著者等の旅行中の体験が記されており興味を引き付ける

が、ややもすると旅行情報の提示に難がある。そのためか、湖水地方旅行書では最初は旅行記が多かったが、次第に案内書が優勢になってくる。ベインズは、一行中の湖水地方に詳しいものに未経験のものが質問をするという設定を導入したり、この書の第I章を「序章」として湖水地方の概略を示すことなどにより、この欠点の克服につとめている。その「序章」でベインズは、湖水地方の景色の特色として「壮大さと美しさの結合」(1)をあげ、山岳地帯の「規則性と不規則性のすばらしい融合」(1)に言及している。成程湖水地方の山や谷、湖は、規模ではアルプスにはるかに劣る。しかし規模は大きければよいというものではなく、ある程度を越えると問題ではなくなる。以上のような考えは、ワーズワスが『湖水地方案内』の「様々な留意点」で述べているものと類似している。⁷

一行はケンダルからウィンダミアに入り、ジョン・ウィルソン (John Wilson, 1785-1854) の住むエリレイ (Elleray) を見て、湖畔派詩人 (“the Lake Poets,”⁷²) について語り合う。それによれば、湖畔派詩人は5、6人で、ワーズワスは「この詩派の父であり王」(73) である。一行はアンブルサイドで投宿し、ラングデイルなどを散策するが、そこに『逍遙篇』から2ヶ所引用されている。その一つは第2巻323-43行である。ブリ・ターンを記述したこれらの詩行を、ワーズワスも『湖水地方案内』であげている。⁸ 彼らはライダル・マウントを訪れるが、時間の都合でワーズワスには会えない。ダーウエント湖に向かう途中のグラスミア湖畔で、ワーズワスとド・クインシーが住んだ家 (ダブ・コテージ) も見ている (103)。以上より、ワーズワスへの言及という面から見た時、この書の特色は、ワーズワスの『湖水地方案内』での考えが取り込まれた点と、ワーズワスの住居を訪ねていることだと言える。

湖水地方への案内書も、初期にはウェストやウィリアム・グリーン (William Green, 1760-1823)、ジョナサン・オトレイ (Jonathan Otley, 1766-1856) など、湖水地方の事情に詳しい個人が書いたものが多かったが、やがて出版社が編集した筆者が不明のものが多くなる。ここではそうしたものの例として、出版業を営むJ. アリソンが出した *Allison's Northern Tourist's Guide to the Lakes, of Cumberland, Westmorland, and Lancashire* (1837) を概観してみたい。

アリソンの案内書では、アルズウオーターからダーウエント湖へと進み、スキドー山の説明にワーズワスのソネット「ペリコン山とオッサ山は並んで高くそびえる」の10-14行をあげている。既に見たように、こうした引用方法は他の案内書や旅行記にも頻出する。アリソンの案内書で目新しい点は、コッカマスの注に「ワーズワス氏はこの町で1770年に生まれた。彼はカンバーランド、ウェストモーランド両州で尊敬され、「湖水地方の詩人」と呼ばれることもある。だが彼は、才能と学識により、それ以上にすばらしい国全体からの称賛と人気も手にしている。」(105) と、ワーズワスの出生地を示しつつ、彼の詩業に最大の賛辞を贈っていることである。さらにライダル・マウントを「すばらしい出版物である『ヤロウ川再訪』

の著者であるワーズワス氏の邸宅」(136)と紹介し、ホークスヘッドの注で、ここの文法学校でワーズワスは初期教育を受け、古典学習に優れていた、と付記している。アリソンの書のこうした特徴は、湖水地方の各地とワーズワスのつながりが一層強く意識されつつあることを示している。

次にWilliam Ford, *A Description of the Scenery in the Lake District, Intended as a Guide to Strangers* (1839)を検討してみたい。著者のフォードの経歴については、彼が一時期ワイバン(Wythburn)の副牧師を勤めた程度のことしかわからない。だが、フォードは著書のタイトルページに「結局のところ、旅行者がどのような喜びあるいは利益を得るかは、その人が旅先に持ち込む心がけ次第である。」⁹というワーズワスの『湖水地方案内』の言葉を引用し、「広告」では「ワーズワスのすばらしい素描と、グリーンの入念な案内書」に感謝し、両者の長所を結合することが本書の目的だと言っている。これらのことから、彼がワーズワスの信奉者であることは明らかである。そしてそのことは、彼の案内の至る所で顔をのぞかせている。

前述のように、景色等の描写にグレイやヤング、さらにはギルピン(William Gilpin, 1724-1804)、ラドクリフ(Ann Radcliffe, 1764-1823)などの文章を借用することは、ウェスト以来の湖水地方案内書の常套手段であった。フォードもそうした方法を採用しているが、使用されている文章は圧倒的にワーズワスのものが多くなっている。また、例えばライダル・マウンツについて、それがワーズワスの住居であると述べてから、「住居にも庭園にも最良の趣味が感じられ、庭園は詩人自身が設計したものである。」(35)と紹介している。こうした記述にはワーズワスへの敬意がこもっているが、内容的には従来のものと大差がない。フォードの書の特徴付ける点は別のところにある。

フォードはウィンダミアは水上と陸地両方から味わうべきだと言っている(20)が、同様の考えはワーズワスにもある。彼はサールミアの西岸を歩くべきだと言うが、これもワーズワスの主張である。また、バタミアの教会堂に関して出所を示さず引用している(77-78)が、これは明らかにワーズワスの『湖水地方案内』からである。あるいは、フォードはラウザー城に関して「堂々たる森林木に出会わないことに不満を持たれた旅行者も、少なくともここでは不満の種が発見できないだろう。」(127)と述べているが、これもワーズワスからの借用である。¹⁰私はペインズの書を扱ったところで、そこにワーズワスの『湖水地方案内』の考えが流れ込んでいる、と指摘した。フォードの書ではそれが全巻に拡大し、著者はワーズワスの考えを全面的に受け入れ、それを土台に自分の説明を展開しているのである。

III

この章では、1841年から1860年頃までの間に発刊された4冊を見ていきたい。最初に取り

上げるのは、1842年にスコットランドで出版業を営むアダム・ブラック（Adam Black, 1794-1874）の会社から出た *Black's Picturesque Guide to the English Lakes with a Copious Itinerary* で、この本は時流に乗り、1886年には第21版が出版されている。¹¹ 執筆者は序文で、この案内書の意図を幾つかあげているが、そのなかに地域の正確な地理情報と、この地の文学的関わりを提供することをあげている（v-vi）。そして後者に属するものとして「有名な散文著作者の作品や、湖畔派詩人の作品からの数多くの引用」（vi）をあげている。案内書の第一の任務は、旅行者を導くことなので、正確な地理情報を盛り込むことは当然だが、本書がそれに伍するものとして、湖畔派詩人の作品紹介をあげているのは興味深いことである。これはワーズワスなどの湖水地方ゆかりの文人が、景色に匹敵するほどの魅力となったことを物語っている。

執筆者は以下において、ワーズワス、サウジー、ウィルソン、ド・クインシーなどを取り上げるが、圧倒的に多いのはワーズワスの作品である。しかもライダルの滝の説明に、ワーズワスの初期の作品『夕べの散策』から引用するなどしており、彼の作品と湖水地方のつながりの研究が一層進んでいることを窺わせる。このことは彼の生涯とこの地方の関係についても言える。ライダル・マウントについて「偉大な現代の哲学的詩人の住居」（16）と述べるだけにとどまらず、アラン・バンク（Allan Bank）が一時期ワーズワスの住居であったことにさえ触れているのである（20）。さらに、詩人がメアリーと結婚するために、ダブ・コテージと呼ばれることになる住居を一時離れる際に詠んだ「一時の別れ」（“A Farewell”）の1-6行を引用している。

このようにブラック社の案内書では、ワーズワスを湖水地方の魅力の一つに位置付け、彼の人生や詩と各地の関わりを熱心に探求しているが、この傾向はスコットランドの詩人でジャーナリストであったチャールズ・マッケイ（Charles Mackay, 1814-1889）の *The Scenery and Poetry of the English Lakes. A Summer Ramble*（1846）で一層顕著になり、詩（poetry）が景色（scenery）とともに表題に掲げられている。マッケイは、湖水地方を巡りながら、至るところでその地にゆかりの詩を紹介していく。そのなかにはストックギル・フォースの印象からシェリー（P. B. Shelley, 1792-1822）の「アラスター」（“Alastor; Or, the Spirit of Solitude”）の一節を思い浮かべる珍しいものも含まれている（34-7）。だが大半は湖畔派詩人、特にワーズワスからで、『逍遙篇』はもとより、ダンギャン・ギルとの兼ね合いで「怠け者の羊飼いの少年」（“The Idle Shepherd boys”）（65）、ポロウデイルのイチイの古木についての「イチイの木」（“Yew Trees”）14-6, 23-33行（144）やエアラ・フォースと「夢遊歩行者」（“The Somnambulist”）（71）など、多くの詩が言及されている。勿論個々の場所の説明に、関連する詩句などを引用することは、これまでもよく行われていたが、その際はあくまでも土地が主であった。だがマッケイにおいては、ワーズワスが詩で取りあげたことが、その土

地への注目度をおおいに高めている事例も含まれているのである。¹²

知人の紹介状を携えてライダル・マウントを訪れたマッケイは、ここは「由緒のある場所」だし、英文学が存続する限り、そうであり続けるであろう、と言っている(19)。また彼は、ホークスヘッドの文法学校も、ワーズワスが学んだが故に名声を得ている、と述べている(58)。湖水地方の土地は、景色がすばらしいが故に人々を魅了するのだが、ライダル・マウントやホークスヘッドの文法学校は、ワーズワスの住居や母校であるが故に注目されるのである。19世紀には英国の代表的な文人にゆかりの土地を訪ねる「文学旅行」(literary tourism)が盛んになっている。¹³ こうした視点から湖水地方のワーズワスを扱ったものとしてはWilliam Howitt, *Homes and Haunts of the Most Eminent British Poets* (1849)などが有名であるが、マッケイの書は、湖水地方がこうした旅行の目的地としてもかなり定着していたことを示唆している。道中で彼が若い文学愛好家と知り合いになり(44)、三日間行動を共にするのも、この地方での文学旅行の高まりを象徴するかのようである。

このように、マッケイの書は湖水地方でのワーズワスの名声の高まりを伝えているが、彼自身は必ずしもワーズワスに心服していたわけでもなさそうである。湖水地方への道中のレバンス・ホール(Levens Hall)で、そのトピアリーをワーズワスが『湖水地方案内』で、「すべての訪問者の称賛的」(5)と言っているが、これは自分には批判の対象にしか思えない、と述べている。勿論ここには誤解があって、彼がワーズワスの『案内』と言っているものは、1842年にハドソン社がワーズワスの『案内』を取り込んで出版した *A Complete Guide to the Lakes, Comprising Minute Directions for the Tourist, with Mr. Wordsworth's Description of the Country, ...* なのである。彼はそこの一文をワーズワスによるものと錯覚したわけだが、ここには、隙があればワーズワスに一言反対したいような態度が潜んでいる。マッケイは知人から紹介状を携えライダル・マウントを訪問し、2時間ほどワーズワスと面会するのだが、その内容を詩人の生存中に語ることは、彼に対する侮辱になりかねないという理由で、既に死去していたサウジーに関すること以外何も伝えない(41-3)。こうした語り方は、彼とワーズワスの間に重大な意見の不一致があったような印象を与える。

この不一致がはっきりと前面に出てくるのは、湖水地方への鉄道敷設の是非に関する件においてである。周知のように、ワーズワスはケンダルーウィングダム間の鉄道建設に反対し、1844年に自分の意見をモーニング・ポスト紙(*Morning Post*)に寄せている。マッケイはそれを引用して「ワーズワス氏は、現代における文明の普及者(鉄道)に対して偏狭で排他的であるうえに、上流人であるかのような見解を示している。」(13)と批判している。また「セント・ビーズ岬沖合で着想を得た詩篇」(“Stanzas Suggested in a Steamboat off Saint Bees' Heads”)での蒸気船に対するワーズワスの姿勢は、鉄道に対するものと同じだとして、「彼は現代を犠牲にして過去を称賛し、現代精神とその機械仕掛けの侍女である蒸気機関を

正しく評価していない。」(155) と皮肉っている。

ジョージ・モグリッジ (George Mogridge, 1787-1854) の *Loiterings among the Lakes of Cumberland and Westmoreland* (1849) は、湖水地方旅行から戻り、ロンドンのユーストン駅に降り立ったリッターという労働者に、迎えに出た子供が湖水地方の話がせがむ、という設定で書かれている。労働者が鉄道で旅をする点からは、新しい時代の到来が感じられる。また父と子供の対話という枠組みは、この書の宗教教育という目的にふさわしいものであると同時に、ペインズの家族旅行という枠組み同様、読者の興味を引き付けつつ旅行情報を提供するという点でも有効なものと思われる。

この旅行記でも、湖水地方の各地の説明に多くのワーズワスの詩が用いられているが、ウェストの案内書で重要な役割を担っていたグレイ等の文が殆ど見当たらない。このことは、湖水地方とワーズワスの結びつきが一層強固になっていることを示唆している。また、湖水地方に関する記述の要所に『湖水地方案内』が引用されたり、下敷にされたりしている。64ページでは湖水地方の景色がスコーフエルあたりに中心のある車輪に例えられているし、155ページでは景色の魅力を決定するのは「景色を構成する事物の色彩の調和」(155) だと述べられている。また144-5ページでは、景色にとって、単なる湖の大きさの数値が問題なのではない、といった趣旨の『案内』でのワーズワスの言葉が引用されている。¹⁴モグリッジは、ワーズワスの湖水地方観の中心にあるものを、自分の考えの根本にすえているのである。

ワーズワスとの会見記も注目される。本書の中心人物リッターはワーズワスの熱心な読者だが、一介の労働者で紹介状も持っていない。それでも彼は、詩人に会いたい一心から5分間の会見を求める。すると「心から発せられたものは、心に届く。」(45) というので、ワーズワスは一か月前に娘のドーラを失っていたにも拘わらず快く申し出に応じ、庭などを案内し、周囲のすばらしい光景を見せてくれる(47)。そこでリッターは詩人の外見や印象を「彼は背が高くやせぎみである。やや顔色が悪く、快活というより思索型である。態度に飾り気がなく丁重だし、発言が率直なので、くつろいだ気分になれた。」(47) と息子に伝えている。ここには慈父のように寛容で人当たりのよいワーズワス像が提示されており、ビクトリア朝的な美化が働いていると思わせるものがある。

モグリッジの書は、1799年に設立された宗教冊子協会 (The Religious Tract Society) から発刊されており、湖水地方旅行も、キリスト教に基づく人間教育の一環に位置づけられている。その際の中心理念は「自然は教えに満ちている。」(95) で、その根拠となるのは「神の造られたもの(自然)と神の言葉(聖書)は一致している。」(207) ということである。そこで、優れた芸術作品を見ればその創作者がしのばれるように、湖水地方の美しい景観に接すれば、一層神への崇拝の念が高まるのである。そこでリッターは息子に、「我々が、眼前に不滅の山々が連なり、透明な湖がこれまでの人生で経験したこともないほど巨大で美しかっ

たり、崇高な姿で広がっているのを見る時、歪みのない感受性に恵まれたものの心は、驚きと喜びと感謝の念で高鳴るものだ。」(170)と教えている。ジェフリーのワーズワス評については第IV章で扱うが、彼は『逍遙篇』の思想を「この宇宙の目に映るものすべてが、生物であろうと無生物であろうと、神の力と善性を示している。それゆえに、宇宙のあらゆる部分が、偉大な属性を指し示すものとして、愛と尊敬の対象となるべきである。」¹⁵というものだとしている。ジェフリーのワーズワス評には明らかな偏見と思われるものが入り込んでいるが、この引用部分は、ワーズワスの考えを適切にまとめたものと見なすことができよう。私がここで指摘したいのは、『逍遙篇』の思想としてジェフリーがまとめたものと、リッターが子供に説いている考えには大きな共通性があることである。そのことが、モグリッジがワーズワスに大きなウェイトを置く理由になっているのかもしれない。ただモグリッジは、彼の神観や自然観の例証としてワーズワスを用いることは控えている。

最後にハリエット・マーティノー (Harriet Martineau, 1802-76) の *A Complete Guide to the English Lakes* (1855) を取り上げたい。マーティノーの案内書は多くの魅力的な特徴を持っている。湖水地方の名士の扱いもその一つに数えることができよう。彼女はクリストファー・ノース (即ちジョン・ウィルソン) (6, 13)、ランダフ主教ワトソン (Richard Watson, 1737-1816) (15)、ヘマンズ (Felicia Hemans, 1793-1835) (18) など、湖水地方に住居を構えた人々にしかるべく言及している。したがって、数年前に歿しているとはいえ、湖水地方最大の名士であるワーズワスに、大きなスペースが割かれても不思議ではない。ところが彼女のワーズワスの扱いは実に控え目である。フォードの書やブラック社の案内書などで見たように、湖水地方の各地の説明にワーズワスの詩句を用いる傾向は、益々顕著になっていたが、マーティノーは必要最小限にしかワーズワスに頼らない。ただし彼女が、この詩人の力量を認めていることを感じさせる文章が、随所に配されていることは否定できない。例えば『逍遙篇』第4巻には次のような詩行がある。

... from the mountain's heart
The solemn bleat appeared to come; there was
 No other—and the region all around
 Stood silent, empty of all shape of life.
 —It was a Lamb—left somewhere to itself,
The plaintive spirit of the solitude! (イタリックス筆者)

これらの詩行のイタリックスを施した語句が、羊にはあまりにも大げさだとして嘲笑う人がいるが、マーティノーは、そんな人々は家畜市場の羊しか知らない人だろうと言う。そして、ワーズワスの詩句は、山中の迷い羊の鳴き声の響きを正しく伝えている、と評価するのである (61-2)。¹⁶湖水地方への文学旅行の聖地とも言えるライダル・マウントの扱いにも同

様の姿勢を見て取れる。彼女はライダル・マウントへの道筋を示すが、その家について格別の説明はしない。ただその庭園からの眺めに関して、「近隣に家を構える人々は、自分の家の立地条件が眺望には最高だと言う。だが彼らの多くは、ワーズワスの家は、自分の家の次にくると考えている。」(54)と、冗談交じりにそのすばらしさをほめるだけである。

こうした点とともに特徴的なのは、マーティノーがワーズワスの主張と思われるものを再三覆していることである。彼女は冒頭で、本書執筆の理由として、湖水地方に鉄道も延び、ウィングミア周辺も大きく変化したので、新しい案内書が必要になったことをあげている(3)。また、スタンリー・ギル (Stanley Ghyll) でのカラマツの植林について「この場面の最新の構成要素である若いカラマツが見る者に不快感を与えることはない。そのあざやかな緑は、生長したブナやオーク、カバ、ヒイラギなどの落ち着いた緑とよくなじんでいる。」(112)と言っている。ここでマーティノーが肯定的にあげている鉄道やカラマツの植林は、いずれもワーズワスが激しく反対したものであった。¹⁷

二人のこのような考えの違いが最も鮮明に表れるのは、湖水地方の変化を論じた136-142ページにおいてである。ここでマーティノーはステイツマンの没落を取り上げている。周知のように、質素ながら独立心に富み、父祖伝来の土地を守りつつ自給自足の生活を送るステイツマンは、ワーズワスの人間観、湖水地方観の重要な支柱であった。彼は「グラスミアの我が家」や『序曲』第8巻などでステイツマンを描いているし、「マイケル」や「兄弟」などの傑作は、ステイツマンの生き方をテーマにしている。そして『湖水地方案内』では「湖水地方の景色について」の第二部と第三部において、この地方の景観の創造と維持に重要な役割を果たしてきたステイツマンが、近代化の影響により没落していくことに強い危惧の念が示されている。

マーティノーは、ステイツマンの没落は、湖水地方が4輪馬車通行道路により他地域とつながり、この地方にも外から商品が入りこみ、住民も競争に晒されたことから始まったと考える。ステイツマンは改良が進んだ地域との戦いに敗れ、土地を手放して労働者になりさがり、酒でうさを晴らしている。マーティノーにとってもこの変化は悲しいことであった。だが彼女は、これもまた時代の趨勢として仕方のないことと容認する。そして酒で身を持ち崩したステイツマンに代ることになる新しい農民などの知識に期待するのである。マッケイのものとも通じるこのようなマーティノー考えは、イギリスの近代化を肯定し、それが湖水地方を蘇生させることを願っており、ワーズワスとは方向性が大きく異なっていたのである。

IV

この章では、注の1にあげた文献などを参照しながら、1800年から50年間くらいの間のワーズワスの文名の推移について概観する。1798年の『抒情歌謡集』出版後から、ワーズワ

スはこの詩集の売れ行きを気にし、販売が伸びないのはコールリッジの「老水夫の歌」(“The Rime of the Ancyent Marinere”)のせいではないか、などと思ったりしていた。しかし『抒情歌謡集』は第4版が1805年10月に出ているし、その批評も格別悪いわけではなかった。

しかし1807年を境に、ワーズワスの世評は急激に悪化した。その主因は、フランシス・ジェフリーが『エディンバラ・レビュー』誌に発表した、ワーズワスの『二巻の詩集』(*Poems, in Two Volumes*)の批評であった。¹⁸ この評の冒頭でジェフリーは、「ご存じのように著者は、ここ数年来、カンバーランドの湖の周囲に集っている、友好的詩人の一団に所属している。」(11)と述べているが、これが「湖畔派詩人」という表現につながったと言われている。ジェフリーによれば、詩が与える喜びには三つあるが、その一つは、詩の用語の特質から生まれてくる(12)。だが、粗野で幼稚なワーズワスの用語からは、この喜びが得られない(14)。さらに悪い点は、独創性を求めるあまりワーズワスが、彼の最も高尚であったり熱意のこもった考えを、大多数が卑俗で他愛無いと思うような事物やできごとと結びつけるので、長年にわたり尊重されてきた詩の規則を無視した、異様な詩が出現することになったことである。ジェフリーはこうした傾向を、現代においてはワーズワスの傑作と評価されている「虹」や「カッコウ」のような作品にさえ認めている。

ジェフリーの以上のような主張は、大筋で『抒情歌謡集』の序文におけるワーズワスの詩観を念頭においてなされている。彼は、ワーズワスは詩の改革者を任じているが、それはいたずらに常識との差異を強調する不合理な衒いにすぎない、と見なしたのである。ジェフリーはこうした姿勢を、1814年の『逍遙篇』の批評でも維持している。彼の以上二つのワーズワス評は、大きな影響力を持つとともに、多くの類似した評を生むことになった。恐らくハズリット(William Hazlitt, 1778-1830)が『円卓』(*The Round Table*, 1817)や『時代精神』(*The Spirit of the Age*, 1825)などで行ったワーズワス評もその一つと言えよう。これらの批評において彼は、ワーズワスが表現しようとする感情や意識と、それを託された人物や事物の間に不均衡を認め、詩の常道から逸脱するこの傾向を、現状をとにかく破壊することで新秩序を打ち立てようとする、フランス革命の精神に結び付けたのである。

このようなジェフリーやハズリットなどの批評に影響されて、1807年から1820年頃のワーズワスに対する評価は最低になり、彼の詩集の売れ行きははかばかしくなかった。しかし彼には1800年代の初めから、ド・クインシーやジョン・ウィルソンのような熱心な信奉者があり、そうした信奉者の増大と彼らの活動により、世人の彼に対する評価も1820年代以降上昇に転じたのであった。ここでは肯定的なワーズワス評の一例として、ウィルソンが1819年に『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Magazine*)に発表した『湖水地方からの手紙』(*Letters from the Lakes*)¹⁹を見ていきたい。

『湖水地方からの手紙』は、ドイツ人が湖水地方を訪れ、故国へ3通の手紙を書くという設

定になっている。第一の手紙では、主人公がこの地方の自然に接し、気分を一新するところが描かれる。第二の手紙はサウジーとの会見記である。第三の手紙で、主人公は朝にアンブルサイドからパターデイルを散策してから、朝食中のワーズワスを訪問する。彼が朝の散策の経路を説明すると、詩人だけでなくメアリーもドロシーもよく知っていることが判明する。ワーズワスに関して、「心に響く詩を書く、シンプルな牧歌詩人といった印象を抱いている人」(53)は、彼の厳粛な姿に接して驚くだろう、と言う。彼の態度には「気高く深遠な思考を常とする心の持ち主に備わる威厳」(53)が漂っているのである。

主人公はワーズワスと連れだって散歩に出る。グラスミアへの途中で、詩人は羊飼いに敬意と親しさをもって話しかけられるのを見て、彼はワーズワスの偉大さが善良さの背後に退いているからこそ、住民が彼に親しみをいだくのだと感じ、詩人に博愛家でキリスト教徒としての側面を読み取る(57)。二人は教会からイーズデイルに進み、詩や批評など多くのことについて語り合う。夕方、家族に迎えられてライダル・マウントにもどり、庭で一時を過ごしながら主人公は、「日中私はワーズワスの見識により教えられたが、今は彼の善良さに魅了されている。」(68)と思うのである。このようにウィルソンの記事は、ワーズワスの詩や『抒情歌謡集』の序文ではなく、彼の日常生活に焦点を当て、厳格で思索を友とするが飾り気なく、家族や隣人にやさしい姿を描いている。これは、独創性を追求するあまり、常識の道も踏みはずしかねないとする、ジェフリー等のワーズワス像と対極的で、ビクトリア朝の人々にさえ容易に受け入れることができるものになっている。

こうしてワーズワスの文名は次第に上がり、1830年代後半のケンブリッジ大学では最も評価が高まったと言われている。この評価には詩人であることと同時に、彼の哲学的思索に対するものも含まれており、思索家としての彼を評価する人々「ワーズワス主義者」(“Wordsworthian”)が増大する一方で、アーノルド(Matthew Arnold, 1822-88)のように、詩人としてのワーズワスの評価を前面に掲げる人々も出現してきた。そして19世紀後半には、ワーズワスの本性をめぐる大論争が展開されることになるのである。

V

これまで第I章から第III章において、湖水地方への旅行書でワーズワスがどのように扱われているかを、そして第IV章ではイギリスにおける彼の名声の高まりについて見てきた。そこから、初期の旅行書での扱いは、詩人としての彼の評価と相当程度関連していることが明瞭になった。1800年からの20年間、湖水地方旅行書での彼の存在感は希薄で、彼に言及した旅行書は4冊しかなかった。そのうちの二つは知人によるもので、しかもシモンの書はワーズワスの政治的変節を匂わせるかんばしくないものであった。これは批評界での、ジェフリーの『二巻の詩集』評に端を発した悪評と符合したものと言えよう。ただこの時期の最後

の2冊は、湖水地方の景色を説明するのに、再三ワーズワスの詩行を引用しており、彼の評価好転のきざしを窺わせるものとなっている。

第2の時期になるとワーズワスの評価は高まり定着するのだが、それに呼応して、湖水地方の土地と、彼の詩や人生の関わりが一層広く深く調査されるようになる。その際に、ウィルソンなどの信奉者がワーズワスの文名の高まりに貢献したように、案内書の執筆者にも彼の心酔者で、その世評に無関心でいられない人々がいたことを忘れてはならない。ヘンリーはその代表的存在である。彼の書からは、彼がジェフリーに縛られないワーズワスの熱心な読者で、発刊された詩集を手掛かりにして、湖水地方と彼の詩文や人生との接点を追求める姿が浮かび上がってくる。彼らの努力で案内書でのワーズワス理解も一段と進み、書中の引用などが、トムソンやグレイなどからワーズワスへと切りかわって行くことになった。

第3の時期には、基本的に第2の時期に見られた傾向から発展した、ワーズワスとのつながりが湖水地方の呼び物となっていく過程が、アダム社の案内書やマッケイの旅行記から読みとれる。言うまでもなく、湖水地方が人々を惹きつける最大の理由は、風景の美しさであった。ところが、ワーズワスの名声の高まりにより、彼自身が湖水地方の土地に新たな意義を与える存在となり、各種の案内書で紹介されるようになったのである。ジェフリーに由来する「湖畔派詩人」は、元来は悪意のこもった名称であったが、それがこの地方の文人の総称となり、ワーズワスはその中心に位置づけられた。その結果、彼の詩で言及された土地は、そのことで存在意義を持つようになる。また、ベインズ以降の書からは、湖水地方がワーズワスとの関連を売り物にする文学旅行の目的地となり、湖水地方旅行者が、聖地化したライダル・マウントにワーズワスを訪ねたことが窺われるのである。²⁰

以上の傾向を受けて、地方旅行書でワーズワスに割かれるスペースはますます増加し、彼の人となりへの言及もかなり見られるようになる。ただ、ジェフリーなどがワーズワスを批判していた批評誌などとは違い、案内書には著しく批判的論調は見られない。恐らくマッケイはワーズワスに悪印象を持ったと思われるが、彼はそれを抑えてはっきり表現していない。それ以外の会見記はほとんどが肯定的で、モグリッジなどは、ワーズワスを寛容な人格者で良き家庭人に仕立て上げている。ウィルソンのものの延長線上にあるモグリッジのワーズワス像が、詩人の実像か彼に対する崇拜の念が作り上げたものかは、意見の分かれるところであろうが、それが彼の名声にふさわしく権威を高める類のものであることは確かであろう。

ワーズワスの評判の高まりとともに、彼の『湖水地方案内』も旅行案内執筆者に頼られる存在となり、湖水地方の景色などについて述べた件に、『湖水地方案内』を背景にしたものが、ベインズあたりから目につくようになる。そしてフォードやマグリッジでは、ワーズワスが『案内』で披瀝した湖水地方観が、彼らの書を中心まで浸透することになる。これは湖水地方

のワーズワス化の始まりで、この地方をワーズワス的に見ることが一般化する第一段階と見なすことができよう。しかしながら、少数ではあるがマッケイやマーティノーのように、ワーズワスの見方に同調しない人々も存在したことが、彼らの案内書から裏付けられる。彼らは湖水地方の近代化に賛成なので、この地方の将来を「現代を犠牲にして過去を称賛」する詩人とは別の方向に見ていたのである。これら二つの考えはやがて衝突し、この地方の方向をめぐる論議が白熱化していくのである。

以上のように、湖水地方旅行書でのワーズワスの扱いには、詩人としての彼の評価を巡る『エディンバラ・レビュー』などの論調に左右されていた側面がある。しかし1810年代後半以降において彼の名声が定着すると、独特の展開を見せるようになる。その一つは、湖水地方の土地とワーズワスの詩や生涯の関連性を調べ上げ、その土地に景観美とは違った意義と魅力を与えることである。二つ目は、ワーズワスの湖水地方観の浸透過程を示していることである。もちろん我々は、旅行案内書から、ワーズワスの詩に関する論議を期待することはできない。だがそこから我々は、ワーズワスの名声は、他地域では考えられない作用を及ぼしていることを知ることができるのである。そしてそこから我々は、一般の人々が湖水地方との関連でワーズワスの詩になにを求めていたのか、あるいは、現代人が抱いている湖水地方像の確立に、ワーズワスがどのように貢献したのかなどについても、これまで埋もれていた知見を得ることができるのである。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号: 21520234)を受けて行われた。

湖水地方旅行書に登場するワーズワス

注

- ¹ そうした書籍の代表的なものとして Katherine Mary Peek, *Wordsworth in England: Studies in the History of His Fame* (1943; New York: Octagon, 1969); Stephen Gill, *Wordsworth and the Victorians* (Oxford: Clarendon, 1998); John L. Mahoney, *Wordsworth and the Critics: The Development of a Critical Reputation* (New York: Camden House, 2001) などがある。
- ² 1798年におけるワーズワスとウォーナーの交流については *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years 1787-1805*, ed. Ernest de Selincourt, rev. Chester L. Shaver (Oxford: Clarendon, 1967) 222-3n; Mark Reed, *Wordsworth: The Chronology of the Early Years 1770-1799* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1967) 242; Mary Jacobus, “‘Tintern Abbey’ and Topographical Prose,” *Notes and Queries* 216 (1971) : 366-9 参照。
- ³ 1801年7月の二人の交流については拙稿 “Warner’s Unrecognized Visit to Wordsworth in July 1801,” *Notes and Queries* 246 (Oxford UP, 2001) : 123-124参照。周知のように、1799年12月に湖水地方に移住したワーズワスは、「グラスミアの我が家」(“Home at Grasmere”)や「マイケル」(“Michael”)「兄弟」(“Brothers”)など、ステイツマンに取材した作品を書いている。ステイツマンに関する知識は広く普及してはいなかったと思われるので、ウォーナーはその知識をワーズワスから得たと言えよう。なお、*The Beauties of England and Wales* 第3巻 (1802) のカンバーランド州を扱った部分 (66-7) で、著者はこだまの効果に関して、ワーズワスの「ジョアンナに」を例にあげて説明しているが、これはウォーナーを模倣したものと思われる。
- ⁴ この時のワーズワスとの交流については Thomas De Quincey, *Recollections of the Lake Poets*, ed. Edward Sackville-West (Paulton: John Lehmann, 1948) 252-56; Mark L. Reed, *Wordsworth: The Chronology of the Middle Years 1800-1815* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975) 462参照。
- ⁵ グリーン家の悲劇と、その後の子供たちの救済については Dorothy Wordsworth, *George and Sara Green: A Narrative*, ed. Ernest de Selincourt (Oxford: Clarendon, 1936) 参照。
- ⁶ この書は *Lake District Tours: A Collection of Travel Writings and Guide Books in the Romantic Era*, 6 vols. (Kyoto: Eureka P, 2008) の第6巻に収録されている。
- ⁷ この部分は、*The Prose Works of William Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser, 3 vols. (Oxford: Clarendon, 1974) の第2巻に収録された『湖水地方案内』のテキストでは2438-2684行に相当する。以下では『湖水地方案内』のテキストはこの版のものを使用し、引用箇所はこの版の行数で示す。なお、この箇所は、ウィリアム・ワーズワス、『湖水地方案内』、小田友弥訳 (法政大学出版局、2010) では105-116ページである。
- ⁸ 『湖水地方案内』156-77行。
- ⁹ 『湖水地方案内』2438-40行。
- ¹⁰ フォードのこれらの発言はそれぞれ、『湖水地方案内』の112-32行、45-80行、1631-38行、485-89行に対応している。
- ¹¹ ブラック社の案内書の初版は、ピックネル (Peter Bicknell) の著書では1841年発刊となっているが、私の所持するものでは1842年となっているので、ここでは1842年と表記した。
- ¹² マッケイの著書は William Knight, *English Lake District as Interpreted in the Poems of Wordsworth* (1878) へと至る方向性を示している。
- ¹³ こうした文学旅行の概要については Ian Ousby, *The Englishman’s England: Taste, Travel and the Rise of Tourism* (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 21-57; Nicola J. Watson (ed.), *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture* (Houndsmill: Palgrave Macmillan, 2009) など参照。
- ¹⁴ 車輪の譬えと湖の大きさについての記述は『湖水地方案内』532-41行、834-50行に対応している。ワーズワスの景色の調和の重視については拙訳『湖水地方案内』(法政大学出版局、2010) 212-14参照。
- ¹⁵ ジェフリーの『逍遙篇』批評は *Romantic Bards and British Reviewers*, ed. John O. Hayden (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 39-52に収録されている。引用は43ページより。『逍遙篇』には、例え

ば第4巻38-45行のように、ジェフリーのまとめに対応する考えが随所で述べられている。

- ¹⁶ マーティノーが引用に使用しているのは、『逍遙篇』の1845年版である。彼女がここで山中の羊の鳴き声を知らないでワーズワスを嘲笑する人として想定しているのは、ジェフリーだと思われる。*Romantic Bards and British Reviewers* 47ページ参照。
- ¹⁷ ワーズワスのカラマツに対する嫌悪については『湖水地方案内』2034-2203行参照。
- ¹⁸ この批評は*Romantic Bards and British Reviewers* 11-25ページに収録されている。
- ¹⁹ テキストにはJohn Wilson, *Letters from the Lakes* (1901) を使用している。
- ²⁰ ライダル・マウントを毎夏新しく訪れる人々は500人以上にのぼったと言われる。Norman Nicholson, *The Lakers: The Adventures of the First Tourists* (London: Robert Hale, 1955) 198参照。

Descriptions of Wordsworth in the Guidebooks to the Lake District

Tomoya ODA

The rise of Lord Byron's fame after the publication of *Childe Harold's Pilgrimage* (1812) is legendary, as is seen from his words "I awoke one morning and found myself famous." Unlike Byron, William Wordsworth came up to fame very slowly. His way to renown has been studied in detail in such works as Katherine Mary Peek, *Wordsworth in England: Studies in the History of His Fame* (1943; New York: Octagon, 1969), and John L. Mahoney, *Wordsworth and the Critics: The Development of a Critical Reputation* (New York: Camden House, 2001). But these works pay little attention to what the guidebooks to the Lake District say about Wordsworth. This paper is an attempt to fill this blank in the study of Wordsworth.

From the latter half of the eighteenth century the scenery of the Lakes began to attract a large number of tourists, and many guidebooks were published for their use. The name of Wordsworth first appeared in one of these guidebooks in 1802. Since then the reference to him gradually increased in number. In this paper, for convenience sake, I have divided the period of 1802 to 1855 into three, and examined how Wordsworth is treated in the four major guidebooks published in each of these three spans of time. This examination shows that in the Lake District the fame of Wordsworth came to exert several peculiar influences, and they contributed much to turning this district to a land of Wordsworth.